

2025年は、19世紀ウィーンを代表するスター音楽家にして、「ワルツ王」との愛称で親しまれているヨハン・シュトラウス二世(1825～99、以下「シュトラウス二世」と略記)の、生誕200年。このニューイヤー・コンサートでも、ダンス音楽の分野に、オペレッタの分野に、多彩な活動を展開した彼の作品が散りばめられると同時に、彼の後輩にあたるレハール、さらに時代を下ってホリクの作品も織り交ぜられるといった具合に、何とも色とりどりだ。20世紀初頭に至るまでウィーンを都とし、中央ヨーロッパに巨大な帝国(通称「ハプスブルク帝国」)を築いていた名門貴族ハプスブルク家の文化の国際性、多様性の理念を、国同士の様々な摩擦が日々報じられる現在に蘇らせたプログラムに他ならない。

そんな魅力的なプログラムを、2025年の幕開けにあたって、ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団が奏でる。ハプスブルク家の帝国が最後の輝きを見せる中、シュトラウス二世が活躍した時代の香りと伝統を今なお色濃く宿すその響きに乗せて、記念すべき「シュトラウス・イヤー」のひと時を過ごしましょう!

### ヨハン・シュトラウス二世：オペレッタ『こもり』序曲

1871年、一世を風靡したダンス音楽の世界から、オペレッタの世界に進出したシュトラウス二世。その彼が、1874年に発表した3作目のオペレッタが『こもり』だ(台本は、この作品が初演されたアン・デア・ウィーン劇場の座付き作家リヒャルト・ジュネー(1823～95)とカール・ハフナー(1804～76)による)。当時のウィーンの社交界を描いた傑作として、昔も今も絶大な人気を博している。

なお「オペレッタ」とは「小さなオペラ」という意味。荘重な題材の多いオペラとは異なる軽さや笑いがメインとなっていったことから、日本語では「喜歌劇」「軽歌劇」と訳されることも多い。元々はフランスの発祥だが、1850・60年代にはウィーンでも大人気となり、シュトラウス二世をはじめ、ウィーンならではの特徴を生かした「ウインナ・オペレッタ」が花開くこととなった。

序曲では、作品中に登場する様々なメロディ、しかもシュトラウス二世やウィーンに相応しく、ワルツやポルカといったダンス音楽を基としたものが次々と繰り出される。ただし単なるメドレーに落ちないのは、シュトラウス二世の優れた音楽的才能があってこそ。しかも単に愉快だけでなく、その背後に深い影が宿されているのが大きな特徴だ。

実のところ『こうもり』が初演される前年の1873年、ウィーンでは万国博覧会が華やかに開催された直後に株価が暴落するという事件が起きており、そうした中で意気消沈する人々を音楽によって励ますべく、シュトラウスが『こうもり』を作曲したという経緯がある。影があるから光も輝く。暗さがあるから夢が花開く。シュトラウスの生きたウィーンはまさにそんな街であり、そこに生まれたのが『こうもり』に他ならない。

ちなみに昨年2024年は、『こうもり』初演から数えて150年目の記念の年だった。というわけで、「ゆく年くる年」を祝うニューイヤー・コンサートの幕開けに、この序曲が取り上げられるのだろう。心憎いまでのプログラム！

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：オペレッタ『ジプシー男爵』より

#### 「こんなに悲惨でこんなに高貴な人は」

『こうもり』以降も、シュトラウスはオペレッタを次々と発表し続ける。中でも1885年に発表された第10作の『ジプシー男爵』は、『こうもり』に匹敵するヒット作品となり、現在でも「ウィンナ・オペレッタ」の代表作としての地位にある。

当時、ハプスブルク帝国は正式名称を「オーストリア＝ハンガリー帝国」といい、ハプスブルク家のおひざ元であるオーストリア同様の政治的権利を、巨大な所領の一部にあたるハンガリーにも認めていた。またそうした中で高まったハンガリー・ブームを背景に、ハンガリー出身の文筆家モル・ヨーカイ（1825～1904）が書いた小説『ザフィ』を基にしたオペレッタが作られることとなった（台本は、これまたハンガリー出身であり、ヨーカイの作品のドイツ語翻訳を積極的に手掛けていたイグナツ・シュニツァー（1839～1921）である）。

あらずじは、領地を追われた父の遺志を継いで祖国に戻って来た若者バリンカイとジプシー（ロマ）の娘（実はトルコ総督の娘）ザフィとの恋を中心にしたもの。「こんなに悲惨でこんなに高貴な人は」は、第1幕の後半、バリンカイに魅かれ始めたザフィの歌う名アリアである。

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：ワルツ『春の声』作品410

1870年代以降、オペレッタの世界にも乗り出したシュトラウスⅡ世。ただしその反面、時間とエネルギーの節約、さらにはオペレッタ本体の宣伝効果ということもあり、彼が発表する新作のダンス音楽については、オペレッタに用いられた旋律を転用したものが多くなってゆく。

そうした状況の中、1883年に初演された『春の声』は、オペレッタとは関係なく書かれた例外的なワルツに他ならない。コロラトゥーラ・ソプラノの歌姫として当時人気だっ

たビアンカ・ピアンキ(1855～1947)による上演を念頭に、オペレッタで培った技を駆使し、独唱付きの形で発表された。またそれに続き、オーケストラのみの演奏によるバージョンもすぐさま作られ、本日もほとんどの例にもれず、こちらが上演される。

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：オペレッタ『ウィーン気質』より「僕が君の夫になった時は」

『ウィーン気質』はシュトラウスⅡ世が世を去った1899年、彼が1873年に発表した同名のヒット・ワルツ(作品354)のメロディを中心に、第三者によって製作されたオペレッタ。加筆編曲はアドルフ・ミュラーⅡ世(1839～1901)、台本はヴィクトール・レオン(1858～1940)とレオ・シュタイン(1861～1921)による。しかも普通であれば、まずは台本が存在し、それに曲が付けられてゆくところを(シュトラウスⅡ世が生前に作曲したオペレッタも、すべてこの工程で作られている)、『ウィーン気質』では先行する曲に台本を後付けするという、離れ業がおこなわれた。(なおレオンとシュタインのコンビは、20世紀に入ると、レハールのオペレッタの台本作者として、大いに脚光を浴びることとなる。)

「僕が君の夫になった時は」は、ドイツ北部の出身で、ウィーンに赴任してから遊び人に変貌した外交官が、浮気の原因を、ウィーン出身の妻に説明(あるいは弁解?)する場面で歌われる。後半に出てくるメロディは、シュトラウスⅡ世の第1作目のオペレッタ『インディゴと40人の盗賊』に登場するもの。その官能的な響きを聴くにつけ、この夫が全く反省していないことがよく分かるのだが、その理由とは?……

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：『常動曲(音楽の冗談)』作品257

『常動曲』は1861年の作品。速いポルカ風の作品で、短い旋律が幾度にもわたって繰り返され、また最初に戻るといった内容になっている。

こうしたことを受けて「音楽の冗談」と題されているが、見方によってはシュトラウスⅡ世の実験精神の賜物に他ならない。何しろ彼は、時代の最先端をゆく作曲家として毀譽褒貶きよほうへんを巻き起こしていたリヒャルト・ワーグナー(1813～83)に心酔し、ワーグナーの作品の一部を自分が指揮する楽団の演奏会で、自作のダンス音楽とともに取り上げていたほど。しかも当時、中世以来の古い市壁を取り払い、大規模な都市改造を経て、近代都市へ変貌をとげつつあったウィーンの活気が反映されているとも考えられる。

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：オペレッタ『ウィーン気質』より「これだけは許せない」

実のところ、『ウィーン気質』の主人公である外交官の夫に悪びれた様子がないのには、理由があった。彼は元々略略結婚によりウィーンの貴族の令嬢と一緒にになったのだが、妻となった女性は結婚当初、夫の堅物さ加減に嫌気がさし、実家に帰ってしまう

た経歴の持ち主だからだ。だが、今やすっかりあか抜けた夫は、愛人まで囲う身となり、妻の好む「ウィーン気質」を存分に具えた粋な男性になりました、というわけである。

というわけで、ウィーン生まれで、生来のウィーン気質を豊かに具えている当の妻にとっては、夫が遊び人でなくなることこそ許せないというもの。そんな、ある意味「粋な」夫婦が歌う二重唱が「これだけは許せない」であり、そのサビの部分には、このオペレッタの原題となったシュトラウス二世のワルツ『ウィーン気質』のメインとなるメロディが用いられている。

### ヨハン・シュトラウス二世：『シャンパン・ポルカ』作品211

シュトラウス二世は、1850年代以降、ウィーンで演奏会のオフシーズンとなる夏、ロシアのパヴロフスクへ、毎年のように自らの楽団を率いて演奏旅行に出かけることを専らとした。逆に言えば、こうした地道な活動が実を結び、シュトラウス二世の名声は、オーストリアやその周辺をはるかに超え、ロシアでもとどろくこととなる。

この曲もパヴロフスクで披露することを念頭に1858年に作られ、元々は『舞踏会のシャンパン』という原題だった。シャンパンは、文字通り酒の中の王様という位置づけであり、好景気に沸く19世紀を象徴するにふさわしい、華やかなアルコール飲料だった。

### ヨハン・シュトラウス二世：『皇帝円舞曲』作品437

こちらも原題は、『手に手を取って』という。それが出版に当たって、出版社の強力な要請により、『皇帝円舞曲』と改められた。なおこの要請をおこなった出版社は、ベルリンのジムロック社である。

ベルリンとウィーン。この2つの都市は、ことシュトラウス二世の生きた時代にあってはライバルなどという生易しい言葉では括りきれない、敵対関係にあった。それが噴出したのが、ドイツ統一に際して誰がイニシアティブをとるのかという問題をめぐり、ベルリンを首都とするプロイセン王国と、ウィーンを首都とするオーストリア帝国が1866年に戦争を交えた事件である。結果はプロイセンの大勝に終わり、オーストリアはドイツ統一の動きから排除された上、プロイセン率いるドイツ帝国の影に置かれ続けることになった。

それでもやがて、バルカン半島にロシア帝国が勢力を伸ばすことを警戒するという点で両国は一致。かつての恩讐を超え、友好関係が築かれる。そうした中で、ベルリンに完成した総合娯楽施設の柿落しにあたって両国の皇帝が臨席することとなり、それを記念して1889年、ヨハンが新たに書き下ろしたのがワルツ『手に手をとって』=『皇帝円舞曲』だった。鉄の規律を誇る軍隊で知られたプロイセン風の行進曲を彷彿させる前奏に、オーストリアの中心地ウィーンで花咲いたワルツが続く。

## ホリク：<sup>いちがついちじつ</sup>『一月一日～ヨハン・シュトラウス風』

ヨハネス・ホリク (1961～) は、ウィーン生まれの現役オーストリア作曲家。協奏曲や宗教曲等、クラシック音楽の王道レパートリーのかたわら、シュトラウス二世の伝統を汲む肩の凝らない小品も数多く発表している。

サントリーホール25周年 (2011年) を記念してウィーン・フォルクスオーパーから贈られた『一月一日』にも、皆さんよく御存じの「あの」メロディが登場する。どうぞお楽しみに！

## レハール：オペレッタ『ほほえみの国』より「君は私の心のすべて」

フランツ・レハール (1870～1948) は、シュトラウス二世の後継者的な存在として、20世紀初頭におけるウィーンのダンス音楽やオペレッタに一時代を画した、ハンガリー出身の作曲家。1929年に初演されたオペレッタ『ほほえみの国』は、彼の代表作であるだけでなく、ハプスブルク帝国が滅んだあとの喪失感を反映しつつ、それを逆手に取った悲劇的なオペレッタ (例えばシュトラウス二世のオペレッタは、途中で色々とおつてもハッピーエンドになるのがお約束だった) という新たな方向性を打ち出した作品となっている。

あらすじは、中国の皇太子と、ウィーンから嫁いだ伯爵令嬢との間に繰り広げられる、悲恋物語。「君は私の心のすべて」は、文化的なすれ違いゆえ、自分から心が離れてゆく妻を前にした中国の皇太子が、彼女に対する情熱的な愛、また愛ゆえに障壁を克服しようと訴えかける、あまりにも情熱的で、あまりにもやるせないナンバーとなっている。

## ヨハン・シュトラウス二世：『トリッチ・トラッチ・ポルカ』作品214

1858年に初演された軽快なリズムのポルカ。ポルカは元々、ハプスブルク帝国の支配下にあったボヘミア (チェコの西部) の民族舞踊から生まれたといわれているが、国際都市ウィーンで洗練されたダンス音楽へと変貌を遂げ、さらにスピード化の時代にあって、快速テンポのものも多数作られるようになってゆく。

「トリッチ・トラッチ」とは女性のおしゃべりを模した言葉で、19世紀にウィーンで初演された同名の戯曲や、ウィーンで発行された風刺雑誌からヒントを得たタイトル。湧き立つような活気に溢れた、女性賛歌となっている。

## レハール：音楽喜劇『ジュディッタ』より「私の唇 それは情熱的な口づけをするため」

『ほほえみの国』をはじめ、シュトラウス二世に代表される19世紀のウィンナ・オペレッタの伝統を汲みつつ、その先を行く作品を次々と作り続けたレハール。1934年に初演された音楽喜劇『ジュディッタ』も、その1つだ。実際、北アフリカの港町の人妻ジュディッ

タと、彼の地に駐屯する外人部隊の大尉との恋を描いた内容は、むしろミュージカルの世界に近いともいえる。「私の唇 それは情熱的な口づけをするため」も、その典型。ジュディッタの揺れる恋心を描いた名ナンバーとして、今でもヨーロッパでは20世紀前半を偲ばせる懐メロとして親しまれている。

なお『ジュディッタ』は、これまでオペレッタで名を成してきたレハールの作品の中では例外的に、オペラの殿堂であるウィーン国立歌劇場で初演されている。そこまで、当時のレハールの存在と人気には圧倒的なものがあった。

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：ポルカ・シュネル『浮気心』作品319

原題を直訳すれば、「浮き立つ心」。1867年に作られている。都市改造に沸いていたウィーンの賑わいや希望を反映したかのような1曲だ。

ちなみにこの曲のメロディは、それこそ「浮気」をテーマとするオペレッタ『ウィーン気質』にも、(シュトラウスⅡ世のあずかり知らぬところで) 採り入れられている。

### レハール：オペレッタ『ほほえみの国』より

「僕たちがここまで愛してしまったのはなぜ」

異なる文化のすれ違いにもかかわらず、いやそれゆえにこそ、互いに激しく愛を燃え立たせる中国の皇太子と、彼の妻になったウィーン女性。「僕たちがここまで愛してしまったのはなぜ」は、そんな2人が繰り広げる美しくもやるせない二重唱であり、むせぶようなスローワルツのテンポが、その思いをいっそう盛り立てる。

### ヨハン・シュトラウスⅡ世：ワルツ『美しく青きドナウ』作品314

シュトラウスⅡ世の傑作として、あまりにも有名なワルツ。ドイツ統一をめぐるプロイセンとの戦争にオーストリアが敗れる中、意気消沈するウィーン子を慰めるべく、敗戦の翌年にあたる1867年に初演された。

当初は管弦楽伴奏付きの男声合唱用ワルツとして書かれ、初演を担当したウィーン男声合唱協会のメンバーが作ったやけっぱち的な歌詞(「楽しくやろうぜウィーンみんな!〜へえ、なんで?」等々)が付けられていた。ただしすぐさま、長い後奏部分を持つ管弦楽用への編曲がおこなわれ、それが同年のバリ万博で上演されて以降、世界中に知られるようになっていった作品だ。

(こみや まさやす・ヨーロッパ文化史研究家、横浜国立大学教授)